

——書——評——

塩沢君夫 著

古代専制国家の構造

中 島 美 良 男

本書は第一章「共同体と生産様式の諸形態」、第二章「共同体と生産様式の歴史的発展過程」、第三章「古代アジア的専制国家の理論」、第四章「日本における古代アジア的専制国家の諸段階」、第五章「象父長的奴隸制の形成」に章別されている。勿論私自身この書と批判する力を持ち合わせていないから、紹介する程度である。塩沢君夫氏が展開されている理論のよつてたつ時代は一般に古代と呼ばれる時期、即ち大化前代と律令

制の社会であつた。これらの社会構造の把握の仕方が、政治的にも経済的にも奴隷制という点に焦点が合わされ、学界でも問題としてゐるところである。

林屋辰三郎氏はその主著「古代国家の解體」の中で、部落制的な観点から、律令制が唐令にならつて賤民制を採用したこと、一方に多量の良民をみ出し、他方で奴隷を賤民という形で固定させ、民衆の分裂支配を遂行した。それはとりもなおさず、大化前代の民衆のなづよい反抗によつて奴隷制支配が動搖し、この時期において奴隷制支配を縮小せしめようとした意図であつた、と指摘された。続けて氏は、律令制は賤民という奴隷を基礎にして、その上に良民というコロヌス制への傾斜を示した半農奴を公認し、時の国家の性格を解體過程にある奴隷制と規定し、この事を前提として古代国家の隆盛期を「倭の五王」時代に求めたのである。又、渡辺義通氏はその著作「古代社会の構造」で公民・班田農民の性格を一種の固有奴隷とみなし、班田という土地を前提としてではなく、人格的隷属を前提としていたから律令制を奴隷制とし、大化前代の奴隷制を再構成したものであると主張されている。このように古代の社会構造の把握の理論が畜産畜奴の如く提起されているのは、日本の奴隷制がいろいろは諸條件に制約されて、古代ギリシャ・ローマのようにならぬ、エルガステリオンに多数の奴隷を駆使した如き典型的な労働奴隷制をとり得ず、家父長的奴隷制が共同体を揺りくずし、展開されたという特殊の形態にあると思われる。この家父長制奴隷制に關する重要な提言が本書第四章、第五章でなされている。この意味で本書第四章「日本における古代アジア的専制国

家の諸段階」に焦点をしほり紹介してみたい。

氏は「律令体制以前の国家の形態が、アジア的な共同体を基礎とし、共同体の首長を通じて共同体を支配するという典型的なアジア的生産様式の段階」であつたが、五世紀末頃から小共同体内部に家父長制家族（家父長的奴隷制ではない（中島）の独立が、んで共同体が弛緩し、家の支配が動搖し、この事態に對峙して「小共同体を基礎とする支配をやめ、共同体の機能を国家が把握する」という新しい体制を作り上げた」のが「律令体制の段階であり、「アジア的生産様式としては最後の段階である」と提言している（本書七六・七七頁）。したがつてこの見解は、従前の林屋氏・渡部氏の理論を否定し、大化前代の屯倉・田莊もいままでいわれてきたような奴隷制經營の場ではなく屯倉・田莊の奴隷的經營を根柢として、当時の日本社会全体を古代奴隷制社会と規定する説は誤つてゐると指摘する。又、氏が律令制社会はアジア的生産様式の最後の段階として把握しているところから、律令制社会そのものも奴隷制社会でなく一歩前の、共同体に規制されて奴隷制的關係を拡大され得ない社会だと見る。この論を更に一歩進めているのが第四章第三節である。「小共同体の弛緩・小共同体内部の家父長制家族の独立化」として生まれた律令体制の土地所有に關する規定を見ると、一に宅地、園地については売買、質入などの処分権もゆるされてあること。次に山川、陂池などは「公私共之」と規定され、国家と班田農民を含めた私人が、共同に利用するように定められていること。次に耕作地はすべて国家の所有とされ、それを農民に口分田として班給する形態をとり、一年間の貢租

をけるす以外は、その区分権はみとめられず、死後国家に返還することになつてゐる、これは農民の耕地に口分田に対する所有は占有であつて、私有を制限してゐることを示す。以上三点に要約され、このことから前節の理論に確信をもたし、律令体制の段階も、「集團的所有と私的所有の発展段階から見てまさにアジア的形態である」と断言してゐる。

猶、以上みた氏の提言は、又、マルクス・エンゲルスの共同体の理論に深くさゝえられてゐるから、氏が第一章、第二章で整理されたアジア的形態の共同体理論に若干ふれ、紹介してみよう。第一章、第二章において共同体を原始的共同体、アジア的共同体、古典古代的共同体、ゲルマン的共同体を段階的に説明され、それら共同体が継起的に生起することと、いままでふれてきたアジア的生産様式に立脚したアジア的共同体を以下のように定義づけてゐる。(一)家屋と庭園(ヘレテイウム)はすでに家族の私有となり、耕地は共有であるが、家族の計算で分割耕作され、生産物も個人的に占取されてゐる。(二)土地の重要部分は共同体により所有され利用されてあり、家族は一時的な私的利用(分割耕作)をするに過ぎなく、灌漑、圃墾などの共同労仍がなされ、個人の成長は極めて弱く、共同体に対して自立的になることはない。(三)この形態の共同体を基礎にした支配的社会構成がアジア的専制国家であり、この国家は「国民的規模で集積された集團的所有として現れ、小共同体の所有権や、共同体内の個人の私有は、この国家的集團的所有によつて制約されて」あり、「国家に専制君主と小共同体との間の剰余労働収奪の形態は特殊な貢納制度」を持つ(第一章、三五、四

〇頁)。以上三つの特色が、大きく氏の向題提起の要因としてあけられる。

このみちびき出された確信を満足するために、「社会的分業と交換」の中で班田農民の負担たる庸および調と賦役令や延喜式でみるとその物産はほとんどが絹、綿、糸、布、塩、その他の海産物とであり、これらはほとんどすべての国から役として出されてゐることからして、国々の間の社会的分業の進展生産物の交換はきわめて微弱であり、農民は依然として共同体内では完全な自給自足的な再生産を行つてゐたと立論してゐる。更に、アジア的生産様式に立脚した律令体制の消長を、律令体制が封鎖する過程で家父長的奴隸制が形成される、この基本的要因を律令体制下のアジア的形態の共同体内部における成員の耕地に対する私有権の確立にあるとするのである。この家父長的奴隸制は八世紀後半以降、広汎に農村に成立つていき、これの一般的成立が古代奴隸制の出発点であり、この奴隸制の確立こそ十世紀に広汎に出現してくる寄進地荘園内の「名」の成立にみ、それを結論づけるために、共同体の古典古代的形態の三つの特色をあけてゐる。第一に耕地に対する私的所有が成立し、共同体は私的土地所有者間の相互關係をとること、第二に耕地の私有、生産手段の家族内蓄積、個別経営、家族の独立化にともなう社会的分業の発展などの諸條件によつて、共同体成員の奴隸制的分解と、家父長的奴隸所有への上昇などにより、家内奴隸制が展開し、家父長的奴隸所有者によつて共同体が構成されること。第三にこの古代的形態の共同体は、諸種属間および古代アジア的専制国家(日本では大化前代、律令制の

社会)の支配に対する闘争のために、軍事的な組織としての結合体であること、(本書一五〇—一六頁)。以上の三点をマルクス・エンゲルスの共同体理論から要約し、これが日本の社会にどういう具體的姿をとつてあらわれたか、という観点から十世紀の日本の社会構成に注目する。先づ「名」の成立は、農民による耕地に列する私有権の確立であり、又、十世紀の寄進地系荘園は、律令制国家からの土地収束の圧迫からのため、権門勢家へ土地を寄進し、自己の私田の所有権をまもるために成立したから、その所有はとりもおさず私有であり、前記の特色を持つた古典古代的形態の共同体でなければならぬ、初期の武士団、後にあらわれる惣領制的武士団、南北朝から畿内地域の名主層の「惣」結合は、主要な側面としてもつていた、専制国家(律令制国家)の圧迫に対する名主層のたゞかいであつたから、オ三の性格に合致している。

上述のように、氏は理論を展開し、古典古代的形態の共同体をふんまえた古代奴隷制の萌芽を十世紀であると結論づけ、問題提起している。

以上、この書における氏の主張の重要な部分をしめて、第四章「日本における古代アジア的専制国家の諸段階」を中心として紹介してみた。要約すると、マルクスの共同体理論を整理し、その共同体の理論を根子として、十世紀以前の、大化前代、律令制の社会とアジア的生産様式に立脚した、古代アジア的専制国家であり、その内には家父長的奴隷制への傾斜をもつた家父長制家族が、共同体から自立する傾向にある。又、そのアジア的共同体から完全に自立し得ず、したがって奴隷制は展開され

得なく、十世紀の寄進系荘園内にみられる「名」の成立により家父長的奴隷制が萌芽するとみているのである。

猶、問題としてきた家父長的奴隷制の形成を第五章「家父長的奴隷の形成」で八世紀の初めの山背国出雲郡の計帳とか、下総国大嶋郷の計帳、又、それ以降の活券証文などから分析して、より明確にあとづけている。この章ではまた、郷戸、房戸の問題にも言及しており、郷戸と房戸の相互關係を理論づけられていた。

氏は本書を通して、奴隷制社会の確立を十世紀に求められるのであるが、群集境の成立を、家父長制家族の抬頭として把握されていた点とか、アジア的形態の共同体の解体は成員の土地私有権の確立である、と断言されている点、種々問題を残しているように思われる。後者の場合、ソ同盟の「経済学教科書」才一卷によると、奴隷制の成立はアジア的共同体の崩壊は、先ず生産手段(奴隷を含む)の私有化にはじまり、それを私有化して後、土地が私有されたのであると説明している。

即ち土地私有を契機として奴隷制が成立するのではなく、生産手段の私有化を契機とすることを提起している。この私有の問題は、「歴史学研究」紙上においても、藤向生大氏などにより問題とされていた。又、律令制を奴隷制とする見解が、当時の課役という勞働力負担が公民自身の再生産をも危くするほどに比重が大きかったという実情から、北山茂夫氏などが指摘している。

このように、当時の農民の搾取と社会構造とを関連させて、律令制を把握すべきではなかつたかと思われる。私自身、批判

(48)

する力を精ち合わせていないから、たゞ二・三の向題点を出してみた。また後の機会にこの向題点を整理して載せてみたいと思っている

最後に私は、以上のように本書を理解したので、誤解している点があれば御指摘下さるようお願いします。(几期)